

西日本への浮線文土器と舟形土器・容器の波及

久田 正弘

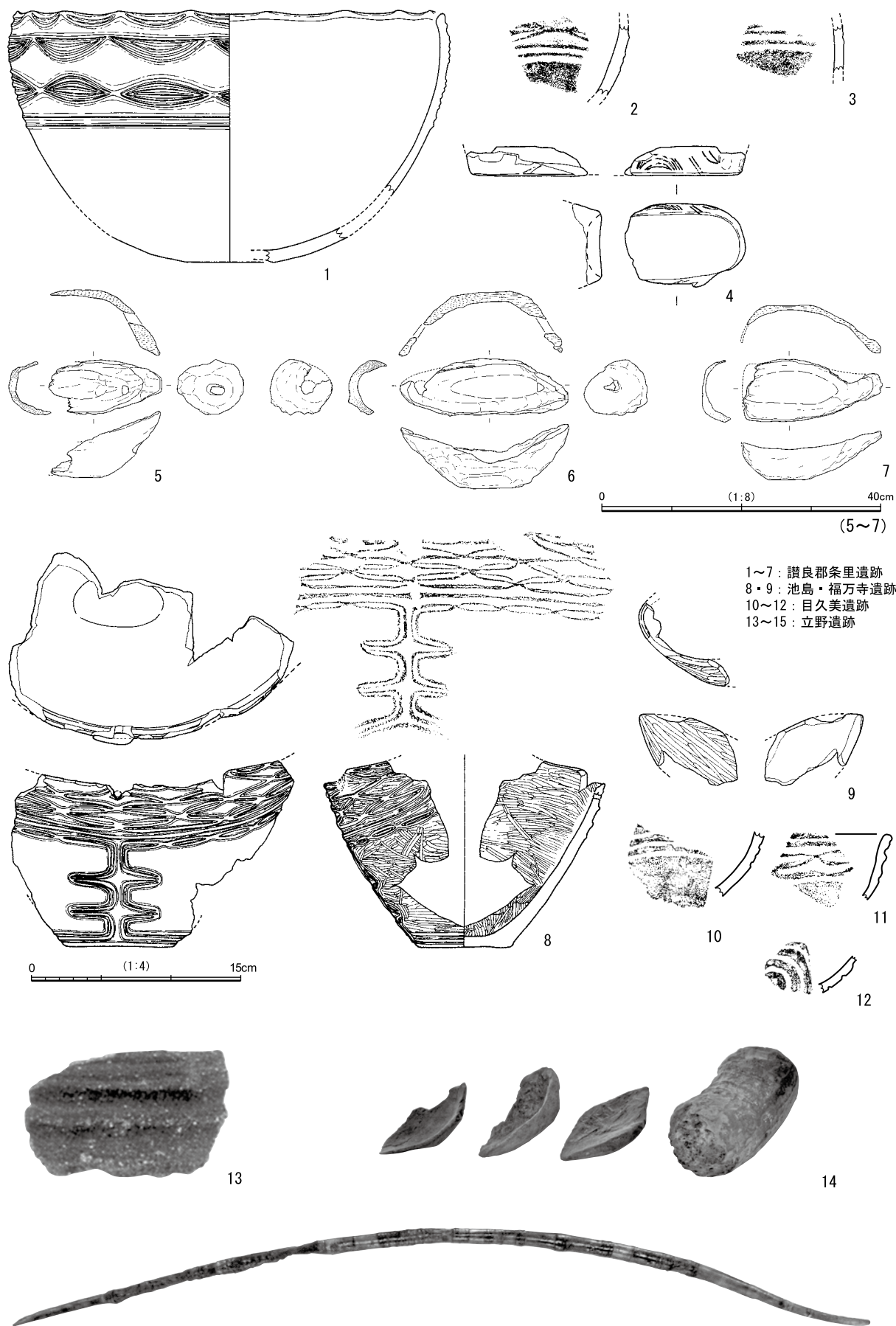
1. はじめに

近年、西日本において東日本系の土器・漆器などの出土が報告され、また西日本系の土器などが東日本でも出土することも紹介されるなど、縄文晩期終末～弥生前期の交流が一方通行的で無いことが明らかに成りつつある。このことは、すでに石川1985・1995、小林青樹1999、設楽・小林2007などによって紹介・考察されているものであり、目新しいものではないが、筆者が気になった事例の中から、土器の胎土写真（第2図）を参考にして紹介したい。第2図の写真は、ペンタックス WG- II の顕微鏡モード（1 cm接写）で撮影した画像を4.5%に縮小したものである。

2. 西日本の浮線文土器と舟形土器・容器

第1図1～7は大阪府寝屋川市讃良郡条里遺跡（中尾ほか2009）出土である。1～3は浮線文土器であり、2・3は色調が異なるが同一個体の可能性が指摘される。1は他と大きく異なる鉱物・岩石組成（報告書F類）であり、斜長石が突出し、石英・角閃石が多く、流紋岩・デイサイトが少量認められるという。砂粒（第2図写真1）は、1 mm 大の白色粒子が主体であり、石英（クリスタル）が目立ち角閃石が少し入る。文様帯構成から、氷I式古段階に併行すると思われる。2・3は同一個体の可能性があり、3は浮線文が体部の区画浮線文と繋がる可能性があるだろうか。2の砂粒（写真2）は白色粒子が主体であり、石英（クリスタル）も入る。3の砂粒（写真3）は、1 mm 大の白色粒子が主体であり、石英（クリスタル）がやや目立つ。筆者の石英（クリスタル）は、透明ガラスを割ったようなものを言っており、火山ガラスを誤認している可能性もあるので、用語は厳密な意味ではなく感覚で使用していることを断わっておく。4は鉢形土器の底部と思われ、小判形であるので類例が無い奇異な土器とされるが、胎土分析では地元産のB類に分類された。砂粒（写真4）は石英基調であり、3 mm 大の長石がやや多く、金雲母・石英も含む。写真上では、4は1～3と砂粒の入り方と質感が異なることが伺えよう。4の文様はヘラにより6条の重連弧文+2本の斜線文+2条の連弧文・1条の縦沈線を持つようである。底部は充填技法の可能性があり、内面には軽いナデが認められたので、内面の一部は生きている。5～6は3-286土坑出土の舟形木製品である。樹種は全てクルミ属であり、5・6は穿孔を持つので棒か紐が組み合わされていたものと思われる。

8・9は大阪府東大阪市池島・福万寺遺跡（田中ほか2008、第5図1）出土である。8は浮線文系土器の舟形土器で離山～氷I式古段階であり、胎土には溶岩・砂岩・輝石を含み、長野県の可能性が高いとされた。肉眼観察では、ミガキ調整の為に観察しにくかったが、砂粒（写真5）は粒子が丸い流紋岩基調であり、2 mm 大の暗灰色砂粒が主体で黒色砂粒を含む。浮線文は太く、文様の段を丸くする程度であり、浮線化していない。また文様の溝底のミガキもシワを残し、ミガキの段を消さないなど、浮線文技法というよりも工字文技法（石川1985）である。口縁部文様帯と胴部文様は、2本の沈線で区画され、口縁部文様帯には浮線文を、胴部文様帯には眼鏡状突帯と王字状文と平行沈線文を持つ。文様帯構成から、離山段階とすれば肩部・胴部文様帯を持つものではなく、氷I式古段階とすれば口縁部文様帯が幅広すぎるし胴部文様帯を持つことはなく、どちらの時期にしても浮線文では文様構成に類例を知らない。9は丸底の底部とされ、生駒西麓産の胎土であるが少量のチャートを含むという。砂粒（写真6）は石英基調であり、2～3 mm 大の長石・石英が主体であり、他に銀色に発色する鉱物を多く含む。口縁部が生きていることから、舟形土器と思われる。



第1図 西日本の浮線文土器と舟形土器・木器

15

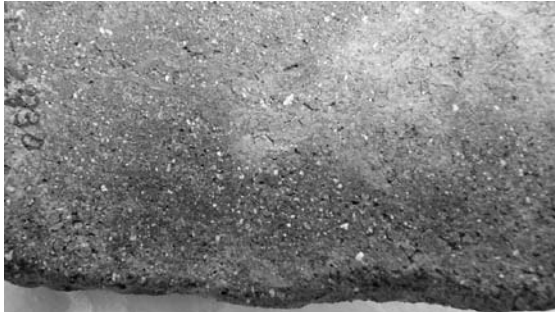


写真1 (第1図1)



写真2 (第1図2)



写真3 (第1図3)



写真4 (第1図4)



写真5 (第1図8)



写真6 (第1図9)



写真7 (第1図10)



写真8 (第1図11)



写真9 (第1図12)

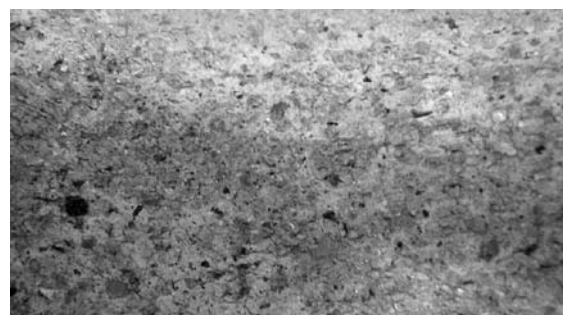


写真10 (第3図12)

第2図 土器の胎土写真

10～12(筆者実測)は鳥取県米子市目久美遺跡出土(第5図2)であり、10は目久美遺跡IV5-F出土(米子市教育文化事業団1995)、11・12は第8次調査出土(佐伯2003)である。10は幅広の沈線を持つ浅鉢であり、文様は工字文・平行沈線文・浮線文かは判断が出来ないが、外面はミガキ・内面はヨコナデが丁寧になされる。砂粒(写真7)は石英基調であり、2mm大の長石が主体であり、次は石英であり乳白色丸石を含む。11は浮線文系浅鉢であり、離山段階と思われる。口縁部と胴部文様帯は沈線で区画し、幅広の文様を持つので北陸地方西部的(設楽2004)である。内外面とも表面は剥離しており、砂粒が良く観察しやすい。砂粒(写真8)は石英基調であり、0.5mm大の石英が主体であり、クリスタルも多い。次に長石が多く花崗岩・白色石を含み、銀色粒子を少し含む。12は浅鉢の体部下半であり、右回りの渦巻き文を持ち、表面はナデ調整で内面は丁寧である。砂粒(写真8)は、表面に見えないが石英基調と思われ、長石・石英・白色粒子が主体と思われ、銀色粒子がやや多い。共に東日本系であるが、砂粒は地元と変わらないことから在地で製作されたものと思われる。

13～15は和歌山県すさみ町立野遺跡(川崎2013・丹野2013)出土である。13は内傾する壺であり、東日本からの搬入土器の一部である。13は肥厚させた口縁部に2条の平行沈線を引き、縦方向の単線を入れて工字文を描いている。頸部に浮線状の突帯があり、斜めの刻みを持つ。外面は横方向のミガキが丁寧になされ、色調は暗灰色であり、胎土は0.5mm程度の白色砂粒を主体として黒色砂粒が微量入る。白色砂粒は丸みが少なく不揃いなものが主体である。ほかに、東海地方から搬入された土器(石英基調)も出土している。多くの木製品が出土した中で舟形木製品の製作工程が復元可能(第1図14)である。樹種はクスノキであり、枝の屈曲部を利用している。15は赤漆塗の飾り弓であり、東日本系と思われる。

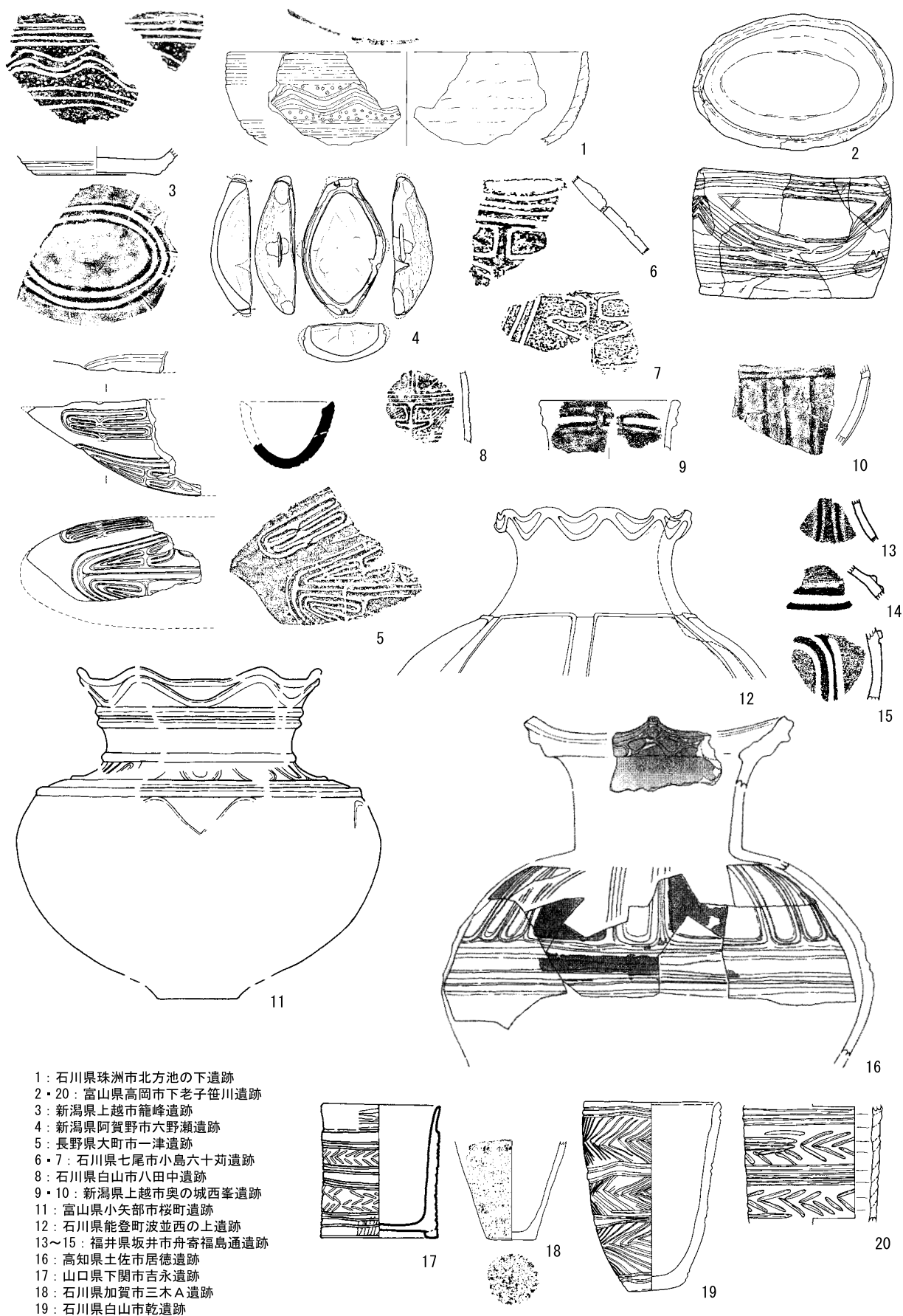
3. 舟形土器の類例

第1図8の砂粒は、長野県産と想定される第1図1～3(写真1～3)や大阪府産とされる第1図4・9(写真4・6)とは写真からも異なることが伺える。また、器形や文様も異なることから類例を見てみたい。まずは舟形器形に注目し、管見にある晩期末の舟形土器を紹介する。

第3図1は、石川県珠洲市北方池の下遺跡(北川2013)出土であり、胴部下半の直線文が拓本の大きく曲った部分から、屈曲している舟形器形である。3本沈線文で上下の区画沈線文の間に山形文と刺突文を持ち、時期は晩期末とされる。第3図2は、高岡市下老子笹川遺跡(町田ほか2006)出土であり、口縁・体部にある2条の区画沈線文の間に多重連弧文を持つ。時期は笹川Ⅳ期(大洞A式併行)とされる。第3図3は、新潟県上越市籠峯遺跡(野村ほか2000)出土の底部であり、体部下半に2条の沈線文を持ち、第1図8の文様に近い。第3図4は、新潟県阿賀野市六野瀬遺跡(石川ほか1992)出土の土製品である。長軸の両端に紐掛け孔があり、短軸の両端にも突起・紐掛け孔が存在した可能性があるという。第3図5は、長野県大町市一津遺跡(島田ほか1990)出土であり、工字文・浮線文状の文様を2段に施文する。

次に第1図8の体部文様である王字状文は、東北地方南部～北陸地方西部に類例があるが、東北地方南部の類例を思いだせなかった。第3図6・7は、石川県七尾市小島六十苅遺跡(土肥ほか1986)出土であり、前期前半と思われる。第3図8は石川県白山市八田中遺跡(久田ほか1987)出土であり、縄文を持つ事から中期初頭と思われる。また、香川県高松市林・坊城遺跡には有文、徳島県徳島市三谷遺跡には無文の舟形土器が存在(小林1999)する。

筆者の管見が北陸地方西部の一部に限定されることから、第1図8の類例を北陸地方西部に求めてしまう傾向がある。砂粒(写真5)の特徴は、福井県越前地方～富山県に認められ、暗灰色・黒色砂



第3図 北陸以西の舟形土器・隆線連子文土器など

粒が主体な場所は、石川県白山・小松市域の手取川・鍋谷川周辺に確認（久田2007）されるが、他の地域や部分的な小地域でも存在する可能性も当然あるので製作地を限定することは出来ない。しかし、第1図8の基本は大洞系土器から生まれたものであり、東北地方やその影響下にある北陸地方・信州地方でも製作可能であるが、長野県産とされる第1図1などとは砂粒が違うことは肉眼観察でも理解できよう。

このような砂粒の違いによる産地の判定は、東北地方の一部で製作された隆線連子文土器（設楽・小林2007）でも可能ではないかと思われる。それは、石川県鳳珠郡能登町波並西の上遺跡の隆線連子文土器（第3図12）の胎土が、地元の砂粒と大きく異なるからである。次に、隆線連子文土器の北陸地方などの出土例（久田2008）や、その後に報告された資料などを紹介したい。

4. 隆線連子文土器の類例

第3図9～16は、東北地方の一部の地域で製作されたとされる隆線連子文土器（設楽・小林2007）であり、東北地方以外で筆者の管見に入った出土例である。第3図9・10は新潟県上越市（旧中郷村）奥の城西峯遺跡（野村ほか2004）出土であり、9は平縁口縁、10は胴部下半であり、同一個体である。他に胴部上半の2破片（未報告資料）が存在する。第3図11は、富山県小矢部市桜町遺跡（大野ほか2006）出土であり、口縁部は7波頂突起であり、胴部上半にはU字状の隆線文を持つ。第3図12は、石川県能登町波並西の上遺跡（平田1976）の土坑から出土した。砂粒（写真10）は、石英（クリスタル）が主体であり、雲母（写真10の黒色粒子）が多量に入る。第3図13～15は、福井県坂井市舟寄福島通遺跡（山本ほか2011）出土であり、東海地方の五貫森式（無文突帯）とされた。これらは実見していないが器形・文様から突帯文系土器ではなく隆線連子文土器と想定した。それは、13は胴部上半、14は胴部上半と下半の区画文様、15はその下に続く部分と想定することが可能であり、11・16と類似している。第3図16は高知県土佐市居徳遺跡（設楽・小林2007、藤方ほか2002）出土であり、搬入土器とされる。また居徳遺跡からはクスノキ製の舟形漆器（佐竹ほか2003）が出土しており、中国大陸製ではなく東日本製（設楽・小林2007）とされた。それは、漆器に隆線連子文土器と共通する隆線があり、北陸系の文様モチーフや朱点を持つことからとである。

5. 筒形容器について

筆者は、弥生前期の綾羅木式系土器の中にある有文筒形土器（第3図17、向上2003）が、北陸地方の19・20との関連があるのではないかと想定（久田2012）した。それは、鳥取県智頭町智頭枕田遺跡の浮線文土器群は信州北部・北陸地方西部から搬入（設楽2004）であり、板付Ⅰ式の文様に亀ヶ岡式土器の関与（設楽・小林2007）があり、鳥根県松江市西川津遺跡の遠賀川式壺の文様が北陸地方西部との関連で成立（設楽2004）したことが明らかにされたことによる。遠賀川式の筒形土器（第3図17）の筒形や綾杉文が北陸地方との関連があるのではないかと想定したからである。しかし、両地方を繋ぐ資料が不明なままであった。

石川県加賀市三木A遺跡から無文の筒形土器（第3図18、垣内2009）が報告され、昨年ようやく18の類例を知る機会を得た。鳥取県鳥取市本高弓ノ木遺跡において晩期終末の突帯文系無文筒形土器が出土しているのを確認したが、詳細な時期やセット関係は報告書にゆだねるが、浮線文系土器以外にも山陰と北陸地方の関連が伺える例となるであろう。また、石川県野々市市御経塚遺跡（吉田ほか2003）では中国地方系の突帯文土器（久田2012）や九州系玉類（大坪2010）が出土し、八日市新保式系土器は鳥根県出雲市三田谷Ⅰ遺跡（岡田ほか2000）や岡山県鏡野町久田堀ノ内遺跡（弘田和司ほか

2005-578・719) で出土していることから、中国地方と北陸地方の交流は縄文時代後期末～晩期前半には確実に存在しており、それ以前の様相も少しずつ明らかになりつつある。

6. 晩期末から前期の交流

西日本で出土した土器が何処から運ばれたのかを検討したい。第4図1は、大阪府東大阪市池島・福万寺遺跡出土(第5図1)で離山～氷Ⅰ式古段階の長野産とされたが、口縁部文様が広くて胴部文様帯を持つなど長野県産としては違和感があり、胎土的には北陸地方西部的である。第4図4は文様帯構成では氷Ⅰ式古段階であるが、口縁部・胴部上半・胴部下半の文様帯を持っており、1と近い様相である。また、4の胴部下半の文様は右回りの渦巻き文であり、3と類似する。1・4・12は浮線文系土器であるが、胴部下半の文様は別系統の文様を施文し、5は浮線文土器には施文されない刻みを持つなど、他系統文様の融合が認められる。

第4図15は和歌山県すさみ町遺跡出土の東日本系土器(川崎2013)であるが、在地の土器(2～3mm大の丸い砂粒、黒・灰色主体)や東海地方系の土器の砂粒(長石主体)とは異なる。15の口縁部は、平縁で工字文を持つのは16と類似する。15の刻みを持つ肩部突帯は17・19・20～22と類似し、内傾する器形は14・20・21の浮線渦巻文土器(神村1988)と類似する。15の口縁部文様は、柴山出村式文様であり、肩部の刻みは飛騨・尾張地方の柴山出村式系土器(19藤田2012、22服部ほか1992)や浮線渦巻文土器(17・21岡本2001、湯尻2012)、刻みは浮線文浅鉢(5町田ほか2006)に類例がある。柴山出村式の特徴文様(沈線を伴う縦位の綾杉文)は、2本の縦沈線を中心に幅広く下向きが普通(16)である。しかし石川県以外や時期が下がるものにおいては、文様の幅が狭く、縦沈線文が欠落ないし1本(12・19・21～23)・綾杉文が上向き(22)などの変化が認められる。

15の胴部片が無いのは残念であるが、器形・文様的には柴山出村式と浮線渦巻文系の融合が認められ、両系統の影響が交わる地域で製作されたものとみなせる。他系統の融合は、4(浮線文+渦巻文)、12(浮線文+柴山出村式、古川2012)、18(浮線文+柴山出村式)、21・24(浮線渦巻文+柴山出村式)があり、下呂市・福井市・高山市・白山市で確認されるので、15の製作地は越前・加賀・越中・飛騨地方を想定出来よう。その中で、白色砂粒が主体なのは、石川県北加賀地方～富山県内に類例を確認しており、富山県に流れ込む河川の上流に位置する飛騨高山周辺も可能性があろう。第4図15の製作地は、飛騨地方を含む北陸西部と仮定すると、和歌山県立野遺跡までの間には、類例などから飛騨・尾張・伊勢地方経由が有力であるが、彦根市下沢遺跡(第4図24、戸塚2012)から滋賀(第5図9)・奈良経由の可能性もあろう。

第4図1・15の製作地は、文様の融合・胎土などから飛騨を含む北陸地方西部の可能性が高いものと想定したい。このように、縄文晩期末～弥生前期にかけて東北地方の土器以外にも舟形土器・容器や筒形土器、北陸地方西部系の土器が西日本で出土していることが明らかとなった。

7. おわりに

近年、東日本系の土器・木器・漆器などが縄文時代晩期後半～弥生時代前期にかけて、西日本での出土が確認され、東北地方系以外にも北陸地方西部系も認識されるようになりつつある。これらの土器には、搬入されたものや在地で模倣されたものもあることから、土器の系譜の解明には、文様だけではなく胎土(砂粒)の差に注目することによって、製作地などを認識することが可能となり、当時の人々の交流関係を少しでも明らかに出来るものと確信している。

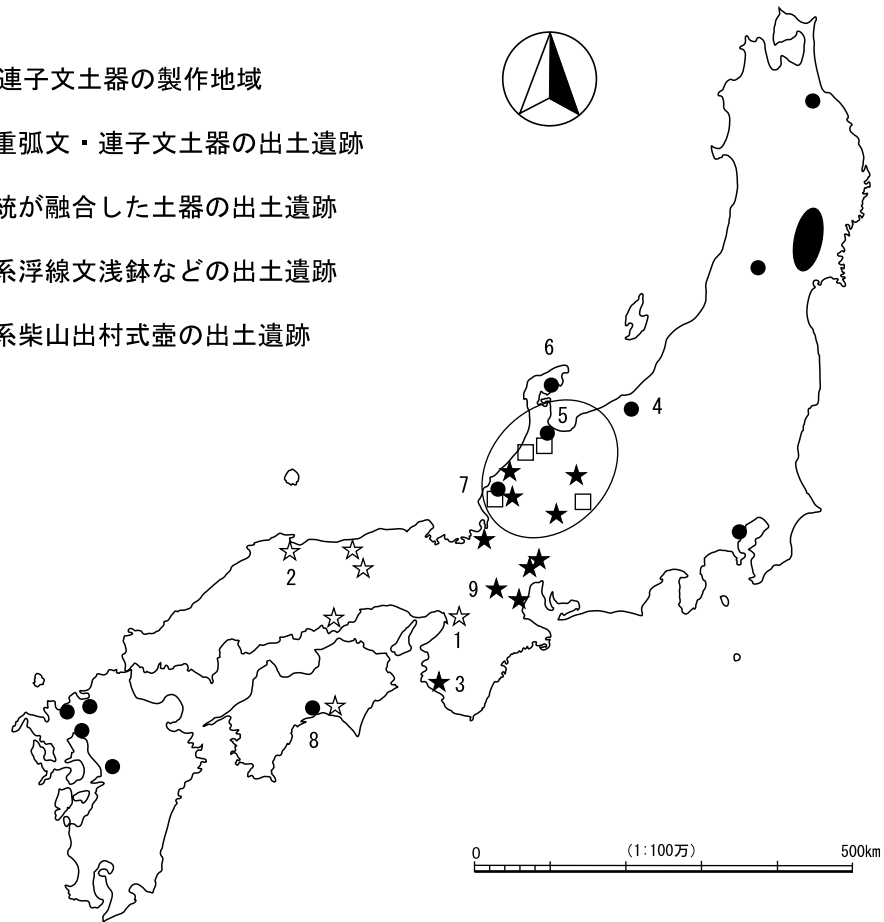
最後に、本稿をまとめるにあたりお世話になった方々の氏名を記して終わりにしたい。



第4図 北陸地方西部系土器の変遷

凡例

- 隆線連子文土器の製作地域
- 隆線重弧文・連子文土器の出土遺跡
- 他系統が融合した土器の出土遺跡
- ☆ 北陸系浮線文浅鉢などの出土遺跡
- ★ 北陸系柴山出村式壺の出土遺跡



第5図 東日本系土器の出土地点

敬称省略。石川日出志、大野 薫、岡戸哲紀、亀島重則、川崎雅史、佐伯純也、戸塚洋輔、丹野 拓、中沢道彦、野村忠司、濱田竜彦、藤田慎一、古川 登、三宅正浩、大阪府教育委員会、大阪府文化財センター、香南市文化財センター、福井市教育委員会、和歌山県文化財センター、米子市教育文化事業団

参考文献

- 石川日出志 1985 「中部以西の縄文晩期浮線文土器」『信濃第37巻第4号』信濃史学会
 石川日出志 1995 「工字文から流水文へ」『みずほ第15号』大和弥生文化の会
 石川日出志ほか 1992 『六野瀬遺跡1990年調査報告』安田町教育委員会
 岡田憲一ほか 2000 『三田谷Ⅰ遺跡 Vol. 3』島根県教育委員会
 岡本恭一 2001 『乾遺跡』石川県埋蔵文化財センター
 大坪志子 2010 「縄文時代九州産石製装身具の波及」『先史学・考古学論究Ⅴ—上巻』龍田考古会
 大野淳也ほか 2006 『桜町遺跡—縄文土器・石器編Ⅰ第3分冊』
 垣内光次郎 2009 『加賀市 三木A遺跡』石川県教育委員会・財石川県埋蔵文化財センター
 神村 透 1988 「浮線渦巻文土器」『条痕文系土器文化をめぐる諸問題—資料編Ⅱ・研究編』愛知考古学談話会
 川崎雅史 2013 「立野遺跡の発掘調査と土器」『農耕社会成立期の木工—立野遺跡を考える—資料集』和歌山県文化

財センター

- 北川晴夫 2013 『珠洲市 北方池の下遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 小林青樹 1999 『縄文・弥生移行期の東日本系土器』国立歴史民俗博物館
- 佐伯純也 2003 『目久美遺跡Ⅷ』米子市教育文化事業団
- 佐竹寛ほか 2003 『居徳遺跡群Ⅳ』高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 設楽博己 2004 「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根県考古学会誌』第20・21集合併号 島根県考古学会
- 設楽博己・小林青樹 2007 「板付Ⅰ式土器における亀ヶ岡系土器の関与」『縄文時代から弥生時代へ』雄山閣
- 島田哲男ほか 1990 『一津』大町市教育委員会
- 戸塚洋輔 2012 『下沢遺跡Ⅰ』彦根市教育委員会
- 田中龍男ほか 2008 『池島・福万寺遺跡5』大阪府文化財センター
- 丹野 拓 2013 「立野遺跡の木製品」『農耕社会成立期の木工―立野遺跡を考える―資料集』和歌山県文化財センター
- 土肥富士夫ほか 1986 『小島六十苅遺跡』七尾市教育委員会
- 中尾智行ほか 2009 『讃良郡条里遺跡Ⅷ』大阪府文化財センター
- 新田 剛 2010 『八重垣神社遺跡(第6次)』鈴鹿市考古博物館
- 野村忠司ほか 2000 『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ―遺物編』中郷村教育委員会
- 野村忠司ほか 2004 『奥の城西峯遺跡』中郷村教育委員会
- 服部信博ほか 1992 『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 藤田英博 2011 「三枝城跡の柴山出村系土器」『三枝城跡』岐阜県文化財保護センター
- 古川 登 2012 『開発遺跡』福井市教育委員会
- 平田天秋 1976 『波並西の上遺跡』石川県教育委員会
- 久田正弘ほか 1987 『八田中遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2007 「混和材からみた土器の移動について1」『石川県埋蔵文化財情報』第17号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 2008 「北陸地方の農耕社会の形成」『弥生ムラの風景』石川県立歴史博物館
- 2012 「石川県を中心とした縄文時代晩期中葉から後葉の土器編年について」『石川考古学研究会々誌』第55号 石川考古学研究会
- 町田賢一ほか 2006 『下老子笹川遺跡』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 弘田和司ほか 2005 『久田堀ノ内遺跡』岡山県古代吉備文化財センター
- 向上昭彦ほか 2003 『吉永遺跡(V地区)』山口県埋蔵文化財センター
- 藤方正治ほか 2002 『居徳遺跡群Ⅲ』高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 山本孝一ほか 2011 『舟寄福島通遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 湯尻修平 2012 「北陸西部の浮線文土器(その1)」『石川考古学研究会々誌』第55号 石川考古学研究会
- 吉田 淳ほか 2003 『御経塚遺跡Ⅲ』野々市町教育委員会
- 米子市教育文化事業団 1995 『目久美遺跡Ⅳ』